

「人工股関節置換術を受ける患者様への日常生活指導を振り返って」

小林病院整形外科病棟看護師

○佐藤 あさみ、鈴木 理恵、渡部 理恵子

人工股関節置換術後(以下THA)には禁止肢位があり、日常生活動作に注意する必要がある。そのため、整形外科病棟(以下当病棟)では、脱臼指導を実施しているが、以前に作成したパンフレットはあるものの活用していることが少なく、時間や方法など病棟内で統一されていない。そこで、当病棟でのパンフレットの活用と日常生活指導における看護を振り返る。

「人工膝・股関節置換術の前後における重心動搖性の変化」

- 1 小林病院リハビリテーション科トレーナー
- 2 小林病院リハビリテーション科理学療法士
- 3 小林病院リハビリテーション科柔道整復師
- 4 小林病院整形外科病棟看護師
- 5 小林病院整形外科医師

○立花 優作¹、米田 佳²、本間 康祐³、野田 健馬³、多田 啓亮³、川口 達也³、長尾 早紀³
濱崎 龍牙³、小倉 慎³、上手 和威²、徳増 瑞香¹、橋本 翔²、樋谷 達也³、武田 洋輝¹、
渡部 理恵子⁴、川村 澄人⁵

【対象と方法】

本研究の目的は当院のTKA、THA 施行患者における術前後の重心動搖計の変化を検証した。対象は平成27年以降に変形性関節症・リウマチによりTKA、THA 施行した患者で術前と術後6月後以上経過時点の重心動搖を計測できたものとした。対象は男性5名、女性17名の計22名、平均年齢70.7歳、身長151.9cm、体重63.5kgであった。

重心動搖計にて開眼・閉眼時の総軌跡長・外周面積・左右最大振幅・前後最大振幅の比較検討を実施した。

【結果】

開眼の術前後の総軌跡長94.0cm/85.0cm、外周面積4.3cm²/3.4cm²、左右最大振幅3.3cm/2.5cm、前後最大振幅3.0cm/0.9cmであり、有意な差を認めなかった。閉眼の術前後の総軌跡長121.9cm/125.7cm、外周面積5.3cm²/5.5cm²、左右最大振幅3.3cm/3.0cm、前後最大振幅3.5cm/3.9cmであり、有意な差を認めなかった。

【考察】

本研究では重心動搖での開眼、閉眼の有意差は見られなかった。本研究の対象患者は変形性関節症・リウマチであり、疼痛を主訴としている患者がほとんどである。統計学的には有意差はないものの、術前より術後の方が、開閉眼ともに左右の軌跡長は小さかった関節構成体が人工関節に変化し、固有受容器が消失しているにも関わらず、重心動搖計の数値に変化が見られなかったことは患者にとって有益な結果であると考える。また、左右軌跡長が小さくなかったことは、左右のバランスが良くなったと考えられる。

「就業時間内の日常的運動による自己判断疲労蓄積度と仕事効率の効果」

1 小林病院リハビリテーション科柔道整復師

2 小林病院リハビリテーション科理学療法士

3 小林病院リハビリテーション科トレーナー

5 小林病院整形外科医師

○川口 達也¹、米田 佳²、本間 康祐¹、野田 健馬¹、多田 啓亮¹、長尾 早紀³、濱崎 龍牙¹、
小倉 悅¹、上手 和威²、橋本 翔²、桜谷 達也¹、武田 洋輝³、川村 澄人⁴

【目的】日常的運動により疲労度の変化を調査した。

【対象】当院リハビリテーション科スタッフ成人男女10名

【方法】一ヶ月間に20分間の運動を就業時間内に実施しました。運動内容は5分間のストレッチと15分間の筋力トレーニングを実施しました。疲労蓄積度は中央労働災害防止協会による疲労蓄積度自己診断チェックリストを用いて疲労蓄積度を評価した。仕事効率はアンケート調査にて評価した。また、仕事量をリハビリの実施単位数（1単位：20分）にて調査した。

【結果】一ヶ月後疲労蓄積度の変化なし8名、変化ありが2名だった。アンケート調査では一ヶ月間の運動実施中疲労度が増えた者が増加したが、一ヶ月間の運動実施中就業時間内に仕事を終えることが増えた者も増加した。リハビリの実施単位数は運動実施前の一ヶ月は一人平均16.0単位であったのに対し、運動実施中は19.2単位であった。

【考察】本研究では運動の実施による自覚的疲労度と仕事効率、そして仕事量を調査した。運動実施中は自覚的疲労度と仕事効率には変化がない者がほとんどであった。全員の仕事量は31.4単位分増加しており、一人平均で3.2単位増加した。仕事時間に換算すると1時間増加したことになる。就業時間内に仕事を終える者が増加した点を考慮すると、実質的な仕事効率は大きく向上したと考える。